みめぐみの

第41部

みめぐみの

第41部

大谷光道著

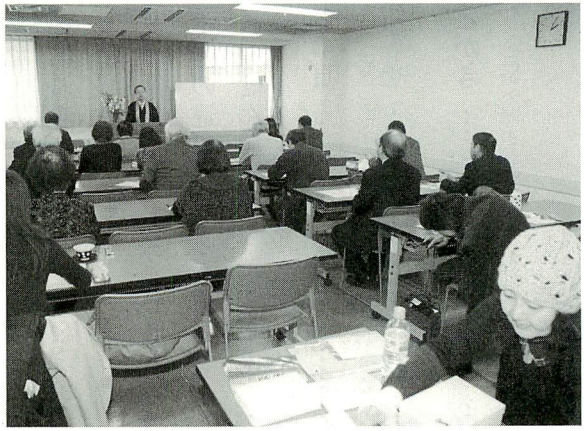
目次

日本史の中の大谷家
——浄土真宗の真実 ……2
何で二つある？ ……4
打倒信長 ……6
教如上人 ……9
京都帰還 ……12
本物、偽物？ ……14
東本願寺 ……17
東西の違い ……21
こうせん派 ……24
読者の頁 ……28
お知らせ ……30
あとがき ……31

日本史の中の大谷家
――浄土真宗の真実

この度は、「なかよし文化倶楽部」の皆様にお話させていただくご縁ができましたこと、嬉しくまた有り難く思っております。

このお話をお引き受けはしたものの、私は歴史が嫌いというのではないのですが、特に年代を覚えるのが極めて不得手でして――では他に何ができるのかということになっても、これといったものもないのですけれども――今日は針のむしろに坐る思いでまいりました。お手柔らかにお付き合いいただきたいと思います。



講演会場

なお、私の敬語の使い方に違和感があるかもしれませんが、私の話癖だとご了承いただきたく存じます。

前もってのチラシの中で、皇室、あるいは徳川家、そういう支配階級と私ども大谷の代々の歴史が重なってきたとご紹介いただいていますが、歴史の中でのいわゆる権力者との関わりのうちで、特に大きなものが三つぐらいあるかと思います。

まず最初は、宗祖親鸞聖人が時の権力によって流罪に遭われた、これが承元元年（一二〇七）の「承元の法難」で、法然上人の吉水教団が弾圧され、後鳥羽院によって法然上人はじめ多くのお弟子方が罪を受け、宗祖親鸞聖人においては越後の国への流罪に遭われたのを言います。これは親鸞聖人を語るときには必ず

出てくるあまりにも有名な権力による宗教弾圧の事件なので、今日は触れないことにいたします。つぎに、江戸時代のはじまりころに本願寺が東と西に分かれました。そしてまた昨日今日のことですが、私の先代の晩年に、いわゆる東本願寺紛争があり、これには解明すべき権力との関わりがあります。

それで今日ははじめに、東西の分派について、私の勝手な視点からお話していきたいと思います。

何で二つある？

東西の分派には、信長、秀吉、家康という戦国のトップメンバーが登場します。

その前に、私自身返答に困る電話を受けたのを思い出したので、ご紹介しましょう。だいぶ前のことですが――現在私は嵯峨に居ります。「嵯峨」だけでもご存知だと思いますが、観光客であふれる嵐山・渡月橋の近くです。

元々はＪＲ京都駅の近くにある東本願寺（現在の真宗本廟）に居りました。その頃のことです――ふと電話を取ったときのことです。「本願寺ですか」と聞かれて、「どちらへお掛けですか。どちらのほうへおかけですか」と言ったら「それは何か。何のことか」と仰るので「東ですか、西ですか」と聞きましたところ、「えっ、二つもあるのか」と、叱られてしまったことがありました。そう言えば、似たようなお寺が二つあるなど、あまりないことなのかなと気づかせられたものです。しかし、いずれにしても二つできてしまっております。このように、中には本願寺が二つあるということをご存知ない方もたまにあります。このように、二つあると聞いてびっくりされる方は珍しくても、「二つあるのはわかっているけれども、どうちがうのか」という疑問は、多くの方が持たれているようです。

学校の歴史では、徳川家康がそれまでの一向一揆の勢力を弱めるために、本願寺を二つに分けたのだ、と習いますが、必ずしもそんなに単純なことで

はなく、多くの人の利害関係や人情、時の流れなど、複雑な渦が巻いていたことが知られてきます。

分かれた当時は東と西はたいそう仲が悪かったようですが、時代とともに良い意味のライバルとなるようにお互いに努めてきたという経緯があります。したがって、あまり西がどうだ・東がどうだという話は、特別に約束があるわけではないのですが、今はタブーになっていると言えます。「寝た子を起こすな」ということでしょう。ただ、今日のように相手の悪口を言うためのお集まりではなくて、歴史の研究をなさるということであり、それぞれの特色をわかっていただくためであれば、一向に構わないのではないかと思います。

打倒信長

本願寺の中興と言われる第八世の蓮如上人の頃に一向一揆が起こりはじめ、蓮如上人はそういう争い事をやらないようにとしきりに抑え、またあるいは

一揆に加担した人を破門にしたりと、厳しい方針が貫かれていたのですが、時代が進むにつれてとてもそれは抑え切れないものとなっていきました。そしてやがて本願寺は戦うことが仕事みたいになっていきます。その一番激しくなったのが第十一代の顕如上人の時代で、いよいよ信長との戦いになりました。それが元亀元年（一五七〇）です。

そのころ、本願寺は大坂（大阪）の石山――今の大阪城――というところにありました。それは蓮如上人が造られた本願寺です。それでなぜか知りませんが、信長が「これが欲しい」（元亀元年一月）と。ああいう人たちが

年表

永禄一（一五五八）一月九日
教如生れる

永禄七（一五六四）一月二十二日
顕尊（顕如二男）生れる
後、興正寺第四世となる

元亀一（一五七〇）
信長と戦う

天正五（一五七七）七月十九日
准如生れる

天正八（一五八〇）四月九日
顕如大阪退去

「欲しい」と言ったらすぐにおいでになるわけですが……。本願寺としては「それは困る」ということで、顕如上人を中心に門徒（信者）――一向一揆をずっと一緒に戦ってきた人たち――がそれを防ごうと九月十二日、打倒信長に決起し、信長との戦いがはじまります。これが「石山合戦」で、押しつ押されつで勝敗が決まらず、天正八年（一五八〇）まで約十年続きます。

正親町天皇からの調停で和議が成立し、天正八年四月、和歌山県の鷺の森というところに移ることになりました。それで顕如上人は石山を出て鷺の森へ移られたのですが、長男

天正八　四月十日
顕如鷺の森へ

教如籠城　信長再度攻める
勅使再度説得

天正八　七月二十八日
教如石山退去

天正八　八月二日
石山本願寺焼ける

天正十（一五八二）六月
織田方・丹羽長秀　鷺の森を攻める

天正十　六月二日
明智光秀謀反　信長、信忠殺される

天正十　六月三日
鷺の森の諸軍退散　教如播州に蟄居

の教如という人が退去を拒み、石山に籠城(ろうじょう)します。

教如上人

ここで教如上人について触れておきましょう。相当大きい人だったようで、掛け軸にして拝む「御影(ごえい)」という肖像画がありますが、それに描かれている絵によると、今で言うイケメンでしょうか。ずいぶん格好良かったようです。もちろん僧侶としても立派だったのですが、ある時は武士の姿で馬に乗って鎧を着て戦ったという伝えがあります。それほど勇ましい方であったようで、石山に籠城とい

天正十　六月二七日
父子和解　教如、顕如に誓詞を出す

天正十一（一五八三）七月四日
貝塚願泉寺へ（父子）

天正十三（一五八五）八月三日
天満川崎御坊へ（父子）

天正十五（一五八七）十二月六日
（顕如の譲り状の日付）

天正十九（一五九一）一月
秀吉より西六条（現西本願寺）の地を賜る、十万余歩

天正十九　一月十九日
准如得度、越前（福井県）本行寺住職となる

うことでも、その意志の強さがわかります。

まあ、それから十二、三代下って私の代になると、ご覧のように、そういう格好いいのとは似ても似つかないこういう姿になってしまっております。ある本によると、「血統というのは一代下るごとに二分の一と、薄くなっていく。十代下ると一〇二四分の一になる」ということが書いてありました。「えらいことを平気で書くなあ」とは思うものの、当たっているのが残念です。

信長が教如上人が和解を守らないことに腹を立てて攻めてきた。それでもうまく石山を落とすことはできなかった。それでまた勅使

天正十九　八月六日
父子上洛　西六条が本願寺となる

文禄一（一五九二）十一月二十四日
顕如没、教如相続

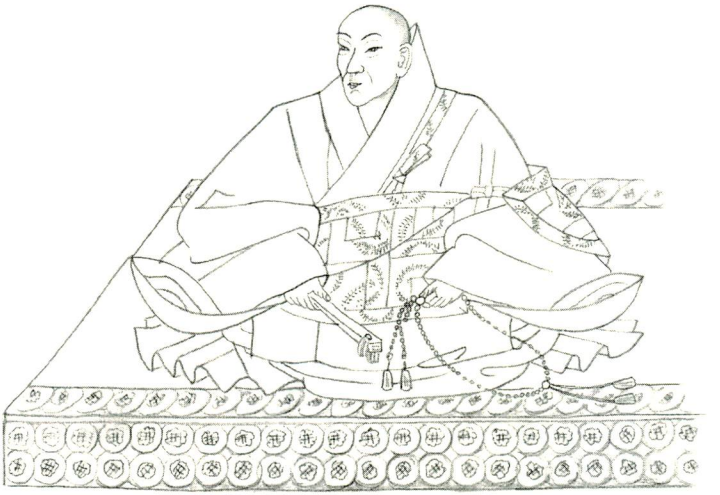
文禄二（一五九三）九月
（譲り状発見）

文禄二　十月
教如引退　如春尼の請いにより秀吉が引退させる、北の方へ

文禄二　十月十六日
秀吉、准如を本願寺住職に認可

慶長三（一五九八）八月十八日
秀吉没

慶長五（一六〇〇）六月十八日
家康関東へ　上杉景勝征伐



教如上人

が来て、教如上人はようやく説得に応じて、父・顕如上人より三ヶ月半ほど後の七月二十八日、石山を退去される。不思議なのがその数日後、八月二日に石山本願寺が焼けるんです。その原因が未だにわからない。一説には教如上人が焼かせたという説もあります。考えてみると、自分が生活をし活動拠点にしていたところを敵に見られるだけでもおもしろくないというのは、非常によくわかることです。今

ならそれが事件になって大変なことになっているでしょうけど、世の中がまだ不安定だった当時には、どうということではなかったのかも知れません。

そしてそれから二年後、天正十年に織田方の丹羽長秀を中心にした軍勢が今度は鷺の森を攻めて来るという事件がありました。ところが六月二日に明智光秀が例の本能寺の変で信長を殺してしまいます。それで織田方の軍勢が「これはえらいことや」と全部退散し、おかげで本願寺は救われたという経緯があります。

京都帰還

それでその月の二十七日に顕如・教如親子の和解があります。さきの鷺の森への撤退にあたって、長男の教如上人が言うことを聞かず籠城したので、お父さんが勘当するんです。息子を勘当することによって約束を守っているという証(あかし)とするための、外に対するゼスチャーです。なぜかというと、これ

には、顕如上人の石山退去直前の「父子の密談」という、父子打ち合わせの上の籠城だったという記録があるからです。しかしいずれにしてもここで全部収まったからということで、お父さんに誓約書を出して、それで勘当は解けるということになります。

その後、貝塚に移ったり、あるいは天満に移ったりしますが、本能寺での信長の死から九年後の天正十九年（一五九一）、秀吉より京都西六条に十万坪余りの土地――堀川通りに面した、現在西本願寺のあるところ――を賜り、そこに本願寺を造って、その年の八月六日、この父子が新しい本願寺に移って、いよいよ京都の本願寺が始まります。これは、文明三年（一四七一）五月、蓮如上人が京都を離れられてから、実に百二十年ぶりの京都帰還です。

ところが喜びもつかの間、その翌年、文禄元年（一五九二）十一月二十四日、顕如上人が報恩講（宗祖親鸞聖人の御命日の七日前から行われる法会）の最中に急に亡くなり――中風だと言われている――、すぐに息子の教如上

人が後を継がれます。

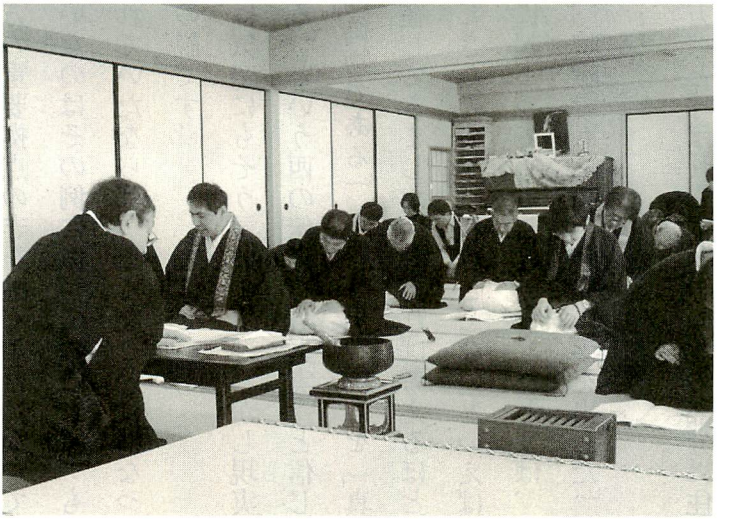
しかし、さらにその次の年、文禄二年になって教如上人が引退しなければならなくなるのです。如春尼（教如上人の母、顕如上人の奥方）が有馬温泉（神戸のほぼ真北にある。日本三古湯の一つ）で療養中の秀吉のところに行き、顕如上人の譲り状（遺書）を示して「教如をやめさせてください。弟の准如にさせてください」とお願いされます。そしてこの文禄二年十月、秀吉より「准如で良かろう」と言われ、教如上人は本願寺の住職から降ろされてしまわれたのです。

本物、偽物？

ここで問題になるのは、如春尼が秀吉に示された顕如上人の譲り状の真偽についてです。これはその当時すでに取り沙汰されていたことですが、西では本物、東では偽物と、西と東ではまったく逆の伝えになっています。私ど

も東のほうでは、「教如上人が如春尼の日頃の行いについて色々と注意された。それに腹を立てて、『辞めさせてしまえ』ということになり、従者に偽の譲り状を書かせた」という伝えです。

顕如上人が亡くなられて一年も経ってからその譲り状が見つかったという不自然さに加えて、准如上人は顕如上人が亡くなる二年近く前の天正十九年の一月十九日に父顕如上人から得度を受けて、越前（福井県）の本行寺の住職となられていたこと



御習礼

です。本願寺ではふつう次男以下は地方の重要拠点の寺を継ぐことになっていて、准如上人が他の寺に入寺されていたのはその例に倣ってのことで、もし父上が本願寺の後を継がせようとされていたならば、そんなことにはなっていないはず、というのが我々のほうの説です。

「真実は一つしかない」と、私たちは気楽にもそう言います。しかし現実には、「顕如上人の譲り状は本物である」という西の伝えを「真実」と信じるグループと、「顕如上人の譲り状は偽物である」という東の伝えを「真実」と信じるグループとが、同時に存在してきました。考えれば考えるほど奇妙なことなのに、そのまま時が過ぎてきたのです。釈然としないといえばそうですが、人間の社会では当たり前に起こっていることです。たとえば、国同士の戦争で「相手が先に撃った」、喧嘩でも「相手が先に手を出した」と。これだって「真実は一つ」なのに……。

さて、その後、教如上人は、「北の方」と呼ばれる本願寺の北の部分に住

んでおられました。これに対し南の方には准如上人と如春尼が住んでおられました。

東本願寺

それから六年ぐらいの月日が経ち、慶長三年（一五九八）、秀吉が亡くなります。

教如上人はかねてから家康と親交がありました。家康が関東へ上杉景勝の征伐に行った折（慶長五年）には、教如上人は、わざわざ下野の国（栃木県）小山の家康のところへ行って、石田三成の不穏な動きについて関西で得た情報を伝えられます。そのときには、帰りの道中は何かと危険なので、餞別をいただかれたとの記録があります。たとえば、長柄槍五十筋、弓三十

慶長五（一六〇〇）七月二日
教如下野の国小山　石田三成の上方筋の情報

慶長五　九月十五日
関ヶ原の戦い

張、鉄砲五十挺というのですから、それほど武装していないと危くて帰って来られないという、こちらも狙われていたのです。それで、岐阜のあたりでは危ないからというので替え玉を立てて、替え玉が表の道を通り、教如上人は裏の険しい道を通ってということまでしたというのです。

九月十五日、関ヶ原の戦いがあって、勝った家康を京都の隣の大津まで教如上人が迎えに行かれた。

そして次の年の八月十五日、家康の伏見の館へ教如上人が会いに行かれます。その次の日には家康が北の方を訪れ、教如上人に「もう一度本願寺の住職になるよう

慶長五　九月二十日
教如、家康を大津まで迎える

慶長六（一六〇一）八月十五日
教如、伏見の館へ

慶長六　八月十六日
家康、北の方へ

慶長七（一六〇二）三月
敷地　東六条・七条に方四丁賜る

慶長八（一六〇三）一月三日
御影（親鸞聖人木像）御入り

に」と言われますが、教如上人は、そういうことはできないと固辞されます。「それなら、もうひとつ本願寺を造りなさい」と勧め、そして「諸国（全国）の末寺と門徒（信者）に『勝手次第、教如に帰参あるべし（西につくか東につくか自由にしてよい）。領主地頭たりとも異議あるべからず（異議を言ってはいけない）』という触れも出そう」と、説得されるのです。それで全国の末寺門徒が東と西とに分かれていくことになります。

またさらに、「寺領まであげよう」というお話まで出ました。寺領というのは寺の敷地じゃなくて領地、大名が持つような領地です。領地があるとそこから年貢が上がるので経済的には助かります。しかし「寺領などがあると子孫が安逸に流れて、教化活動をしなくなります。私のところは門徒の寄進でやっていきますので、寺領だけはお断りいたします」と教如上人はとことんそれを辞退されました。

そして七月三日、東六条七条に方四丁（ほうしちょう）の土地をいただかれたのです。今は

当時より狭くなっていますが、京都駅近くの今の烏丸の土地です。この「丁」というのは「町」と同じことで、江戸時代の一丁は六十間なので、四丁四方は五万七六〇〇坪になります。そこに東本願寺ができることになります。

つぎに、この本願寺に安置するのに、教如上人はどうしても前橋（群馬県）の妙安寺に伝わる宗祖親鸞聖人の木像がいいと所望され、徳川家から寄進されることになりました。こんなことのできるのは、やはり徳川家だなあとは思いますが、その後妙安寺は葵の紋の使用を許されたそうです。東本願寺はここにはじまることになります。

たとえば教如上人の次の第十三世・宣如上人が、三代将軍家光から渉成園（俗に枳殻邸。一万坪）を隠居所としていただかれるなど、その後、東は徳川家から代々優遇されてきました。これは明治になって西が国家権力から優遇されるようになって、東西逆転するまで続きます。明治には東は北海道の開拓など、過酷な事業を引き受けたりして国のために尽くしながら、命脈を

保ってきたのです。

東西の違い

東と西とでは百八つの違いがあると言われます。百八つというのは数が多いという意味で、百八という正確な数を言っているのではありません。分かれた後、それぞれの違いをよりはっきりさせるために両方で違いを作っていったと考えられます。

一、柱：東は丸、西は四角。

二、御堂の飾り：東は黒の漆を塗って金物を多用して飾る、西はほとんど金物は使わず極彩色。

三、内陣を歩くとき：東は挿鞋（布を貼った木製の浅いくつ）を履く、西は履かない。

四、出仕（内陣へ入ること）：東は畳の上でふつうに向きを変える、西は

畳の上でしゃがんで片方の足を軸にして回転する。

五、お練り：東は前の人と適当に距離を取りながらだらだらと歩く、西は一、二、三、一、二、三と調子をとって歩く。

六、散華（花びらをまく）：東はしゅっと天井まで届くようにまく（父はすごく上手でしたが私は未だに真似できません。すごく派手なまきかたです）西では地味にぱらぱらとまく（極楽で花びらが散るイメージなので、このほうが近いかも知れません）

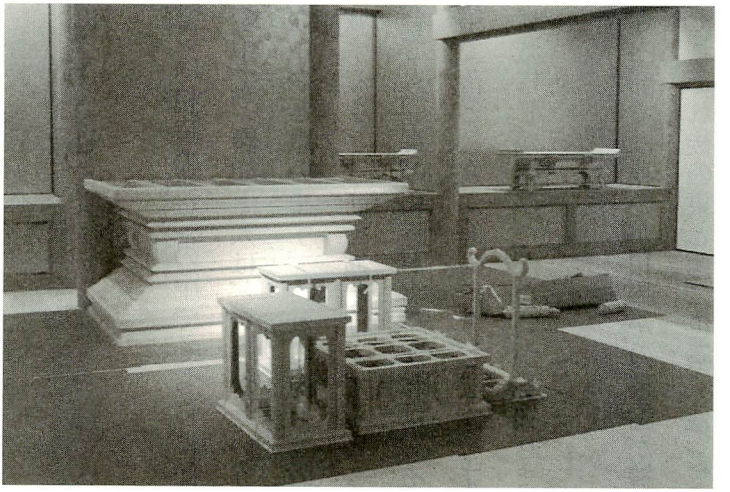
七、衣：東は無地、西は地模様。

今度、本願寺関係のお寺にお参りか見学されたときには、ああこういうことなのかと思い出していただいたら、興味がお湧きになると思います。

それとまた、声明、お勤め。僧侶の称えるものは全て「お経」と呼ばれることが多いのですが、お経というのはお釈迦様の仰ったことを書いたものを

言い、大体棒読みのものです。これに対し、節のあるのを声明と言います。

声明の節は、唱える文句はもちろんですが各宗旨によって違います。東と西とではまるで別の宗旨であるかと思われるほど違います。これは元禄二年（一六八九）――四十七士の討ち入りの十二年前――に、お西では声明全部をがらっと変えられたからです。これは、あえて違いを出そうとした頃からするとちょっと時代が下りすぎているので、そういう動機であったかどうかはわかりませんが、両者の違いとして



塗りの前の仏具を寸法確認

は大きなものの一つです。

こうせん派

信長との十年に及ぶ石山合戦では、時には和睦の兆しの中でそちらに傾き、また時には戦いに戻りしていた経緯の中で、顕如上人はどちらかというと和睦に傾かれたことが多かったのではないかと思います。これに対し、教如上人はいったんできた和睦も無視し籠城するなど、筋を通そうとするところが強かった方なのでしょう。どんな場合でも、真の和睦が実現すれば、それに越したことはないのですが、相手次第で落とし穴があったりします。また逆に戦いをのみ事とするばかりでも、自滅にしか結びつかないかも知れません。

おそらく東西が分かれる前から、本願寺内部では戦いか和睦かの議論が続いていたものと思われます。その流れがそれぞれ後の東と西に色濃く残って

いったものと考えられます。それで、私共のほうはよく「こうせん派」だと言われます。喧嘩が好きなんですね。近年の紛争の一番はじまりの昭和四十四年頃、名古屋の御門徒で我々側でたいそう力を入れてくれていた、ある旅館の女将さんのおもしろいひと言が思い出されます。名古屋弁丸出しで「喧嘩は大きいほうがええでなあ！」。この女傑はこう言うと、続けて「火出し本願寺と言うでな！」と。東本願寺でなく火出し本願寺。「ああ、そうなのか」と思いましたね。

こうせん派だと言うんで、こんな字かなと――「抗」。これだと信長に抵抗して本願寺を守ったという意味でしょう。辞書を引いてみると、いっぱいあるんですね、これ以外にも。「交」もあります。一戦交える「交」です。攻撃の「攻」もね。それとまさに喧嘩に繋がるのが「好」。だからどれか知りませんが、いずれにしても、どれをとってもおとなしくはない。もう、すぐに一戦、始めちゃうんですね。

この間、ここ二、三日前にお西の記事が出ていましたけれども、今までの私の見てきたところからすると、何かあってもすぐに大人のお話をされ、内部でまとめておしまいになる。ですから、今度も私はおそらくこれ以上記事は出ないんじゃないかと思います。もしさらにどんどん記事が出るような状況になったら、私の話が「おかしいんじゃないか」と言われてしまうので、ちょっと困るなと思っているところです。

歴史というのは勝者の歴史であると言われます。勝たないと歴史には残してもらえない。教如上人が信長と戦われた、そのことの正しさを残すために東を残してくださったのではないかと、私なりに解釈しております。負けるが勝ちなんていうこともあるので、必ずしも派手にやるのがいいわけではないのだけれども、やはり戦うべきときには戦う勇気を持つのが必要なことだと、教如上人の残されたご功績を、私なりにはこのような解釈をしながら日を送っています。

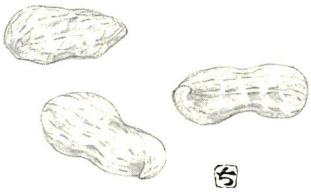
〔註〕この度、筆者の大学の同級生のご縁から、東京の「なかよし文化倶楽部」という歴史研究グループでお話をすることになり、去る二月六日、同会からいただいた「日本史の中の大谷家――浄土真宗の真実」という題で講演しました。

今号は、このお話に筆者が手を入れたものです。

なお、この講演ではこの後、近年の東（大谷派）の紛争について、そこに働いた外部の権力に着目し、その根本を探る新たな視点を論じたのですが、誌面の都合で別の機会に譲ることになりました。

〈参考文献〉

大谷嫡流実記　大谷大学編　真宗大谷派出版部
真宗年表　大谷大学編　法藏館
真宗史稿　山田文昭著　法藏館



読者の頁

感想 意見

神奈川県相模原市　山本　誠子さん

光道台下のご本、純子様の栄賀をお祝い申し上げます。

「みめぐみの」ご本が西善寺様から届きました。母の妹が百一歳の天寿。弟が九十三歳でその妻が八十八歳と、叔父様を追いすがるように七月八月と定命をまっとうして三人共お彼岸に当たる二十三日、二十四日と本当に阿弥陀仏様にすくわれました。私は今も親族や友人の方々を偲び唱えて清々しい思いです。来年五月喜寿を迎えますので法要に嵯峨野へ参詣に参ります。

京都府長岡京市　登　幸雄さん

下京の真宗大谷派内局から嫌がらせの様な各種妨害で、布教活動が出来ない状態の中で刊行された教化冊子「みめぐみの」。第一部から第三十九部まで読ませて頂きました。

大谷家六人兄弟の中で唯一人、嵐山で誕生された光道台下が四百年間歴代御門主が住まわれた下京の東本願寺を出られて、この嵯峨・嵐山の地に新しい本願寺をつくられたのは偶然というより、定められた必然と言う事ではないでしょうか。単行本「いづれの行もおよびがたき」にも少し言及されていましたが、此の度第四十部「みめぐみの」では、はっきりと前門様の遺書を掲げられました。それは穏やかな人柄の光道台下が五月の本堂落慶、宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌の年に当たり、正統東本願寺大谷家第二十五世当主を力強く宣言された事と承りました。

新生本願寺の更なる勝法宣布を祈念致します。　合掌

平成23年5月

	午前8時	A:午前10時半 B:午前11時	A:午後2時 B:午後2時半
16日		御遷座法要 B	本堂落慶法要　A
17日			大遠忌法要 初逮夜A
18日	晨　朝	初日中　A	逮　夜　B
19日	晨　朝	日　中　A	結願逮夜　B
20日	晨　朝	結願日中　A	

いよいよ大法要!!

☆稚児行列……仮御堂から新御堂への御遷座行列にはお稚児さんも加わります。（16日）

☆帰敬式（お剃刀）……随時執行致します。

☆坂東曲……今までは特定の僧侶のみに許されていた坂東曲を、広く一般の方にも参加頂けるように呼びかけて、有志の方がお稽古中です。（20日）

この他にも、宝物の展示を計画中です。

本願寺寺務所

あとがき

みめぐみの刊行委員会

いよいよ五月に本願寺の宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要と本堂落慶法要を迎えます。大法要を前にお忙しい中、光道台下は東京に招かれて「日本史の中の大谷家」と題する講演をされ、その内容を『みめぐみの』にまとめて下さいました。今回も「阿弥陀様と本願」はお休みです。

本願寺も平成十七年に嵯峨の地に仮御堂が出来て五年半。今回お話下さった東西本願寺の分裂は遠い昔の歴史物語と言うべきものかもしれません。しかし、この度の落慶する本願寺はこれからの〝生きた本願寺〟です。

台下はこの講演の最後に「やはり戦うべきときには戦う勇気を持つ」と、さらっと仰っていますが、こうした戦いはお一人で出来るものではありません。台下の後ろ姿を追いつつ、御指導に沿いたいものです。

この勝縁を機に、一層お念仏の喜びの輪を広げて参りましょう。

皆様からのご感想、ご質問をお待ちしております。どしどしお寄せ下さい。

バックナンバー、追加注文の頒布価格、送料は次の通りです。
『みめぐみの』１冊の価格は200円(税込)です。

○1冊～4冊＝送料及び振替手数料（70円）はご負担下さい

※送料　1冊＝120円、2冊＝160円、3冊＝180円、4冊＝210円

○5冊～9冊＝送料は実費、振替手数料は不要です

※送料　5～6冊＝210円、7～9冊＝290円

○10冊以上＝送料・振替手数料共に不要です

以上の要領で申し込みを受け付けます。折り込みハガキにご住所、氏名、電話番号をご記入下さい。ハガキに切手は不要です（ご住所には郵便番号をお忘れなく)。

みめぐみの　第41部

2011年３月５日　印刷
2011年３月10日　発行

定価 200円

著　者　大谷光道

発　行　みめぐみの刊行委員会

〒616-8432
京都市右京区嵯峨鳥居本北代町21
本願寺寺務所内
TEL.075(882)6262 FAX.075(882)6220
振替口座　01060－5－56990

印　刷　㈱中外日報社

みめぐみの刊行委員会刊